

まだまだ残暑がこたえませんが、如何お過ごしでしょうか？

夏の暑さも盛りの先月1日から4日まで、西本願寺(京都・本山)の常例布教を任されておりました。本願寺派の布教使としてはこの上ないご縁を賜り緊張の中冷や汗をかきながらなんとか取り次いで参りました。また一つ伝道の糧となるご縁でした。

さて、戦後70年を過ぎたこの夏、塚本晋也監督の映画「野火(のび)」という作品を坊守と家のDVDで鑑賞いたしました。この作品は作家・大岡昇平氏の実体験に基づく小説を映画化したものです。あまりにもリアルで過激な映像が見る人に衝撃をあたえる作品であるとの事は知っておりましたが、実際観ますとそれは想像をはるかに超えるものでした。映画開始から最後まで目を覆いたくなるような場面が度々飛び込んでくるといっても過言ではないぐらいです。これが映画館のスクリーンであったならば、最後まで席を立たずに見ることは出来なかったかもしれません。とにかく戦争の(戦地の)悲惨さを

ぎりぎりのラインまで映画を通して描きたいという作者の思いは強く伝わってきます。細かい描写は観ていただければ解るかと思えます。この映画は必ず生涯の一本として記憶に残る作品であることは明らかですが、この作品が私に教えてくれたことはなんであったかをここ数日考えておりました。

ちょうど仏教の基礎を見直しているところでありましたので、そのことと重ねて考えた時深く頷けることがありました。

仏教は偶然とか奇跡ということをいいません。すべて縁起であるといえます。すべてのものが生じるのは原因がありその原因にあらゆる条件が重なって次なる結果が生じる。因縁果という法則のみでありそこには自我というものは存在しないというのが基本です。お釈迦様が苦しみということを因縁果で探っていかれたとき12の原因を観つけられました。ここで一つ一つの説明は省きますが、その中に「愛(渴愛:カツアイ)」ということがでてまいります。渴愛とは人間の心の奥底に存在する根本的欲望で

す。なんとしてでも生きたいという欲です。結局この欲が苦しみを生むこととなります。この渴愛が一番あらわになってくるのが「餓え」ということなのだということをこの映画が教えてくれているように思えます。餓えが極限になると人間の理性は働かず渴愛の心がそのまま出てきます。戦場はその心の集合体が繰り出す想像を絶する修羅場であるということです。

仏教はすべての欲を滅し苦しみが一切無い「涅槃」という境地に至ることを目的とします。そのため修行をするのですが、浄土真宗の有難いことはその修行すら積むことのできない凡夫といわれるものを「涅槃に必ず至らせてみせる」という阿弥陀様の他力のこころを聞かせていただきそのこころを人生のおおいなる依り所とさせていただきみ教えです。

戦場に念仏者がどれだけいたかは解りませんが、いま南無阿弥陀仏を称えさせていただく中で自分の心の奥にある本性と真実の救いを日々聞かせていただくことの大切さを改めて思います。南無阿弥陀仏